

【自著紹介】山 愛美『村上春樹、方法としての小説 記憶の古層へ』

(新曜社 2019年12月)



本書は、深層心理学、心理臨床学の立場から、村上春樹の小説の創作過程をともに体験するような読み方を提示し、なぜ村上の作品が多くの人を力づけ、惹きつけ続けているのかを探ることを試みたものである。

もし、文学者でも文芸評論家でもない私が、何のためにこの本を書こうと思ったのか、と問われたなら、私は迷うことなく、それは村上春樹の本当の凄さを知ってほしかったから、と答えるだろう。そんなことを言うと、いやいや何もいまさらあなたがそんな本を書かなくても、彼の凄さを知っている人は世界中にたくさんいるでしょう、と一笑に付されるかもしれない。もちろんその通りである。しかし、ここで私の言う村上春樹の凄さというのは、彼が物語の創作を通して行っている「心の仕事」のことである。物語が生まれる創造の過程を想像しながら読むことで、作品の印象も随分違ってくるのではないだろうか。

村上春樹の作品は、今日50以上の言語に翻訳されており、世界中に多くの熱心な読者がいる。彼の創作は、1979年の『風の歌を聴け』から始まり、すでに40年以上の間途切れることなく続けられている。なぜ村上の作品は、国、民族、文化、言語を超えて多くの人々に読まれるのか。私は、その秘密は彼の創作方法にあるのではないかと考えている。彼は、日本ではほとんど人前に姿を現すことはないものの、自らの創作についてはインタビューや対談集、随筆を通して饒舌である。本書では、これらの情報から、できるだけ本人の言葉を拾いあげて読み解き、創作について探ることを試みた。

各章を概観する。第1章、村上の創作の基本は、あらかじめ自分の中に何らかの伝えたいメッセージや主張があって、それを表現するというものではない。むしろ、メッセージを見つけるために物語を書いているという。そのために、小説を一つの枠組みとして、その中で自らの心の深みに下降し、物語が自発的に語り始める場を作り上げる。第2章では、創作を通して村上が取り組んでいる実存への問いにつながる普遍的なテーマについて取り上げている。第3章では『風の歌を聴け』に登場する架空の作家デレク・ハートフィールドの世界観について注目する。そこでは、それまで自明のものと思っていた「私」という概念自体が不確かになる。このような世界の存在に一度気付いてしまうと、なかなか普通に生きていくのが難しくなる。これは、今日取り沙汰されることの多い、引きこもり、不登校の問題とも深く関わっているし、何となく自分の人生

を生きている実感がないといったような、現代人の多くが折にふれて持つ感覚の背景にある世界とも繋がっているだろう。こんな世界を見てしまった村上が、このような世界観を持ちながら、どのように生きてきたのか、そして創作を通してどのように救済されたのか、彼の小説家としての歴史の中にそのプロセスを見ることができる、と私は考えている。続く第4、5章では、村上の創作の方法論がどのように確立されたのか、またどのような背景からそれが生まれたのかについて、彼の記憶の古層にまで遡り明らかにすることを試みた。村上の創作には、言葉だけではなくイメージの力が重要な意味を持っている。第6章では随筆『使いみちのない風景』を読み解き、村上の創作過程における目に見えないイメージの働きについて探り、最後に、村上春樹の物語の力、創作の秘密に迫った（第6章）。さらに「効率と想像力」について言及し終章とした。

心の深みに下降し、そこに留まり、自らの内なる混沌、暗闇の中に入っていき、そこで起こることを観察し物語という形でそのままリアルに描きたい、と村上春樹は言う。そして、自分の魂の不健全さというか、歪んだところ、暗いところ、狂気を孕んだところ、小説を書くためにはそういうのを見ないと駄目だと思う、と述べている。言葉にしてみると簡単そうに聞こえるかもしれないが、これは孤独であるというだけではなく危険な作業でもある。心理療法での体験から、自分の内面と向き合うこのような「心の仕事」がどれほど大変で、時に危険で恐怖を伴うものであることを、私は知っている。悩みや問題を抱えて我々の元に来談される方たちも、心理面接の過程の中で自分の内面と対峙することになるが、そこには心理療法家という同伴者がいる。しかし、村上はずっと一人でこの作業と取り組み、さらにそこから創造的なもの―物語―を生み出してきている。このような仕事をやり抜くには、集中力、持続力、体力が必要である。村上は、毎日、規則的で健康的な生活を送り、走ることを通して自らの身体との対話を重ねながらこのような力を養ってきた。長い年月をかけて自分一人の力で、独自の創作方法を築き上げたのである。このようにして村上春樹が語る物語は、様々な背景を持ちながら生きている、多くの読者の心の奥深くにあるもの（「魂」と呼びたい）と呼応するのである。

変化が目まぐるしい現代社会においては、目に見える結果や効果ばかりが求められる傾向にあるように見える。表層の目に見える部分ばかりに心を奪われていると、取り返しのつかないことになるのではないか。世間を震撼させる事件の勃発、容赦なく襲ってくる自然災害、そして私がこの原稿を書いている今（2020年9月）、グローバル化したはずの世界の行き来を阻んでいる目に見えない新型コロナウイルスまでもが、我々に何か警告を発しているのではないかと思う。村上春樹はこのような現代社会に対して物語を通して密かに「物申し」続けている。

学部・大学院時代の今は亡き恩師河合隼雄先生と、米国での村上春樹との対談直後お会いする機会があった。『ねじまき鳥クロニクル』執筆中と書き終わった後とでは、村上さんは全く別の人物だったと語る「すごいでー」という先生の声が、今も耳に鮮やかに残っている。

最後に、このささやかな拙著を読んでくださった方が、次に村上春樹の物語を読む時、これまでとは違った何かを感じられることがあったなら、それは私にとってこの上ない喜びである。

【山 愛美（深層心理学・臨床心理学・心理療法、ユング心理学、
創作（文学・造形）活動の心理学的意味、心の無意識領域へのアプローチ）】